

新居浜の漢文文化に関する研究

一般教養科・野田 善弘

「恒産なければ因りて恒心なし」(『孟子』梁恵王上)

新居浜といえば、別子銅山の開坑によって開かれた日本屈指の工業都市である。新居浜が産業の恒常的發展(「恒産」)によって豊かな都市へ変貌すると同時に、そこに住む人々の「心」も豊かなものになっていったに違いない。人々が「恒心」、すなわち「確固たる思想文化」を獲得していくうえで、「恒産」を産出する別子銅山の存在は不可欠であった。そして、今度は逆に新居浜の「恒心」が別子銅山とその産業を支えていく。私は、そんなわけで、幕末から明治にかけての新居浜の思想文化に強く惹きつけられ、少しずつ研究を進めている。私は漢文学、なかでも中国思想史の分野が専門である。そうした分野から新居浜を眺めてみると、実に豊富な漢文文化がこの地に存在することに驚いた。住友・別子銅山の経営者たち、広瀬幸平や鷲尾勘解治が漢詩文を嗜んだことは有名である。彼らの漢文学の素養が、企業エートスの形成にどんな作用を及ぼしたのか、とても興味深い。

思想史を専門とする私は、優雅な漢詩人よりも謹厳な儒学者に関心を持つ。新居浜に縁のある儒学者といえば、はじめに近藤篤山が挙げられよう。大学で吉田公平先生(現・東洋大学教授)に師事したことで、新居浜高専に職を奉ずる前から、近藤篤山の名は知っていた。が、幕末の朱子学者としての篤山の名は知っていたものの、篤山が別子銅山と深い関係をもっていたことは知らなかった。当時、愛媛大学におられた加藤国安氏(現・名古屋大学教授)が、別子銅山を詠んだ篤山の漢詩を紹介され、はじめて新居浜と篤山の深い縁を知ることができたのである。加藤氏は、私を近藤篤山の研究チームに誘ってくださって、篤山の漢詩文を抄訳し、その成果をまとめて『伊予の陶淵明 近藤篤山』(研文出版、二〇〇四年)を出版した。私はこの仕事をきっかけにして、新居浜の漢文文化について、いっそう強い関心をもつようになった。

明治新居浜の儒学者、遠藤石山について知ったのも、その頃だった。新居浜市立図書館で、その漢詩文を収録した『石山遺稿』(広瀬満正編、大正三年刊)を閲覧したとき、冒頭に収録される「大学提綱」という文章に魅了された。そこには私が好む儒学者流の議論が展開され、「人の人たる所以の道」が語られていた。石山が稽崇館という漢学塾を開き、その門下生、広瀬満正や小野寅吉らが新居浜の発展に寄与したことを知るにつけ、この「大学提綱」に示された「道」が新居浜の「恒心」形成に大きな影響を与えたのではないかと考えるようになった。そこで、私は「大学提綱」の訳解を学術雑誌に発表した(『東洋古典学研究』二十三～二十六集)。すると、これがきっかけで地元の遠藤石山研究者ともつながりを持つことができた。内藤雅行氏の『鄙を照らした儒者の生涯 遠藤石山物語』(泉川まちづくり協議会、二〇一一年)から石山の生涯について多くのことを教えられ、また新居浜市泉川まちづくり協議会の皆さんからもお声をかけていただくようになった。私の漢文や中国思想史研究が少しでも地域文化の顕彰に役立てば幸甚と、今後も新居浜の漢文文化について研究を進めていきたいと考えている。

新居浜高専は、平成二十四年四月に創立五十周年を迎える。しかし、新居浜の地に技術者養成のための学校が最初にできたのは、実は昭和十四年のこと。この時開校した新居浜高等工業学校は、後に愛媛大学工学部となり、昭和三十八年に松山へ移転するが、その跡地を利用し、新居浜高専が設置されたのである。新居浜高等工業学校以来の技術者養成の伝統は、愛媛大学のみならず新居浜高専にも継承されている。そう考えれば、新居浜高専は、七十年以上の歴史をもつことになる。新居浜高等工業学校の設置に尽力した人物の中に小野寅吉がいる。小野は、すでに述べたように遠藤石山の門下生。されば、新居浜高専には石山の精神、すなわち新居浜の「恒心」が流れている。新居浜高専を産出した新居浜の漢文文化に興味は尽きない。



新居浜市立泉川小学校に移築された遠藤石山家塾稽崇館の碑。